

## ■ 編集委員

齋藤 一之 (委員長)

板橋 明	糸山 進次	菰田 二一	鈴木 洋通	竹内 勤	土田 哲也
中塚 貴志	西村 重敬	禾 秦壽	廣瀬 隆則	間嶋 満	渡辺 修一
和田 攻	(五十音順)				

## ■ 編集後記

花粉で霞む(?)春真っ只中、澄んだ冬の空気が懐かしい今日この頃です。

さて、埼玉医大誌はじめ皮膚科専門誌の編集などで、月に40編以上の論文査読をさせていただいておりますが、その際、常に感じるのは日本語の面白さと難しさです。

日本語における大和言葉と漢語の渾然一体となった様はある意味では感嘆すべきことです。古くは漢語を咀嚼した上で日本の言葉にしてきた経験は、18世紀以来、欧米から導入してきた医学用語についても生かされています。日本の医学教育において他のアジア諸国のように英語のままで学ばないのは後進性の表れだとする意見もありますが、これはどうでしょうか。外来の言葉を導入する場合、それを自国の言葉に咀嚼・吸収して初めて、その言葉を用いる学問はその地に根付いて社会的にも広く深く理解されるようになります。難しいのは最初の導入であって、多くの先達による成果の恩恵を蒙ることのできる我々にとって、その延長上で国際的に通用する英語を学ぶことは難しいことではありませんし、最初から英語だけで学ぶよりも遥かに理解を深めることができるはずです。

その際、そういった医学用語としては殆ど和製の漢語が用いられてきたことは面白いことです。これは、古来、理性的な面を表現する言葉としては大和言葉よりも漢語の方が語彙豊富だったという歴史的背景に加えて造語のし易さも関係するかもしれません。病気に関する大和言葉も勿論ありますが、普通は正式の医学用語ではありません。これは欧米における自国語とラテン語の関係に似ているとも言えます。病気のことを大和言葉で表した場合は、慣用的であるが故に曖昧さを有するだけではなく、その語感から心の琴線に触れるものを感じ取ってしまうのでしょうか。病気に関して差別用語として言われているものの多くが大和言葉であるのは偶然ではありません。我々が感情を伝え合う手段として最も優れた大和言葉はわかりやすさの反面、常にこのような難しさもあります。このことは患者さんとの対話の際にいつも念頭におくべきことです。

最近、ある人の悪口を書いた文庫本を目にしました。肝心なところは急に難解な漢語を並べ立てて如何にも学問的に批判しているという体裁になっていました。これも日本語の便利さではありますが、日本語の多彩な表現法はもっと他に生かして貰いたいものです。

(土田 哲也)

## 埼玉医科大学雑誌

<http://www.saitama-med.ac.jp/uinfo/jsms/>

第30巻 第1号 通巻108号 (季刊)

編集責任者 齋藤 一之

平成15年1月1日 発行

発行所 埼玉医科大学医学部

350-0495 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷38

電話 049(276)2125 (直通) FAX 049(276)2127 E-mail: igakkai@saitama-med.ac.jp

郵便振替 00540-6-19727

制作 株式会社アテネデザイン

東京都港区三田1-11-19 小宮ビル2階 電話 03(3456)5741 (代) <http://www.atene.co.jp>